別紙１－１

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨 お よ び 担 当 者

報告番号	※　　第　　号

氏　　名　　馮　亜静

論 文 題 目　　中国語を母語とする日本語学習者によるオノマトペの習得

論文審査担当者

主　査　名古屋大学教授　　玉岡　賀津雄

委　員　名古屋大学教授　　杉村　泰

委　員　名古屋大学准教授　鷲見　幸美

委　員　名古屋大学准教授　秋田　善美

別紙１－２

論文審査の結果の要旨

論文の意義

日本語を母語とする幼児は，音と動作を関連づけるプロセスを経てオノマトペを習得するといわれている。ところが，外国語としての日本語を学ぶ場合は，このプロセスを経ることなくオノマトペの習得が進むとされる。音との関連性がないまま学習しなくてはならないため，他の語彙と比較して，オノマトペの習得は極めて困難であると指摘されている。しかし，この議論は，日本語学習者の習得データに基づいて展開されているわけではない。同様に，多くの先行研究で，日本語を母語とする場合，擬音語の基本義から擬態語などへと意味拡張するとされている。これはオノマトペを意味習得の観点からみた考察である。ただし，母語話者と同じような意味拡張のプロセスで日本語学習者もオノマトペを習得しているかどうかは，実証されているわけではない。さらに，オノマトペは，サ行変格活用のスルを付加して動詞として，また他の動詞を修飾する副詞としても機能する。日本語を母語とする場合には，まずは動詞を習得してから副詞を習得するという順序があると議論されている。これは統語習得の観点からみた考察である。この点についても，日本語学習者が，日本語母語話者と同じような習得のプロセスを経るかどうかは実証されているわけではない。

馮亜静氏の博士論文では，中国人日本語学習者によるオノマトペの習得を意味と統語の両面から取り挙げて，こうした日本語母語話者のオノマトペ習得に関する先行研究の議論と比較検討した。その手順として，中国人日本語学習者によるオノマトペの意味的と統語的習得のプロセスについてデータを収集し，構造方程式モデリングや決定木分析などの多変量解析の手法を駆使して，実証的に研究を進めた。その結果，日本語母語話者と中国人日本語学習者のオノマトペ習得のプロセスには大きな違いがあることを実証した。これまでのオノマトペの議論は印象で展開されることが多かったが，それを実証的に検証した点で，本博士論文の学術的価値はきわめて高い。

論文の概要

馮亜静氏の博士論文は全９章からなる大作である。

第１章では，①意味拡張（「擬音語から擬態語へ」および「触覚から触覚以外へ」の意味拡張）によるオノマトペの意味習得の連続性，②擬音語と擬態語の習得における影響要因，③オノマトペの軽動詞付加（以下，スル動詞）と副詞の品詞転換習得，④擬情語動詞への身体感情名詞句の付加有無, の４つについて検討することを概観した。

第２章では，L1 と L2 における日本語オノマトペの習得に関する実証的研究，および非日本語母語話者による日本語オノマトペの音象徴への感覚評価に関する実証的先行研究について検討した。L1 では，幼児期から音象徴の感覚を身につけ，周りの言語

環境からのオノマトペのインプットにより，オノマトペを一般語彙よりも容易に習得しているとされている（Imai, et al., 2008; 佐治他, 2011 など）。日本語オノマトペの意味習得プロセスにおいては，「擬音語＞擬態語＞擬情語」という「語彙的類像性の階層」にしたがって，語彙的類像性の高い擬音語から擬態語へ，さらに語彙的類像性の低い擬情語への順序で日本語オノマトペを獲得していく（Akita, 2009）と考えられている。また，スル動詞から副詞への品詞転換現象が起こっていると説明される（佐治・今井, 2013; 鈴木, 2013 など）。さらに，日本語学習経験のない非日本語母語話者も本語オノマトペの音象徴的特徴の一部分を普遍的に捉え（Iwasaki et. al., 2007; 荒田他, 2010 など），擬態語よりも擬音語の音象徴を捉えやすい（Iwasaki et al., 2007; 栄, 2011）といわれている。

第 3 章では，辞書，コーパスに基づいて共感覚比喩の視点から擬音語の準擬態語化と完全擬態語化について考察した。擬音語・擬態語両用のオノマトペにおける聴覚の感覚転用パターンを総括し，さらに「視覚＞触覚＞動静感覚＞気分感覚＞次元感覚＞味覚←→嗅覚」という「感覚転用の可能性仮説」を提起した。また，五感内の感覚転用は，聴覚から触覚への感覚転用パターンが最も多いため，触覚が擬音語の完全擬態語化プロセスには重要な知覚機能を担っていると考えられる。さらに，触覚を介して他の感覚が味覚へ転用されるため，触覚は味覚と他の感覚の間の橋渡しのような機能を担っていると考えられる。なお，五感領域から五感以外の領域への感覚転用には，触覚は共感覚として最も次元感覚，動静感覚，気分感覚を修飾しやすい傾向がある。この調査結果に基づいて，以下の調査研究のための刺激語として選定した。

第 4 章では，擬音・擬態両用のオノマトペの 12 語を刺激語とし，141 名の日本語学習者に擬音・擬態両用のオノマトペの意味理解課題を課し，日本語母語話者のように「擬音語から擬態語へ」の意味拡張による日本語オノマトペを連続的順序で習得しているかどうかを検討した。その結果，擬音語のほうが擬態語よりもより良く習得されていた。そのため，オノマトペの習得に関する先行研究に基づいて，語彙知識から擬音語と擬態語の習得の因果関係について 3 つのモデルを設定した。モデル 1 は，語彙知識から擬音語へ，そして「擬音語から擬態語へ」という直列的な因果関係習得モデルであった。モデル 2 は語彙知識から擬音語および擬態語へと別々に習得されるとする並列的な因果関係モデルであった。モデル 3 は基本的な語彙知識から擬音語と擬態語がそれぞれ独立して並列に習得され，同時に「擬音語から擬態語へ」という意味拡張による直列的な習得の流れも起こるとするモデルである。そして，構造方程式モデリング（SEM）により擬音語と擬態語の 3 つの習得因果関係の解析を行った。その結果，モデル 2 は最適であった。これにより，「擬音語から擬態語」へという習得の直列的な因果関係はなく，語彙知識が擬音語と擬態語の習得に別々に寄与していることがわかった。このようにして，日本語学習者は，オノマトペの擬音的意味と擬態的意味

を連続的に習得していないことを実証した。

第 5 章では，触覚の多義オノマトペの 8 語を刺激語として， 141 名の日本語学習者に触覚オノマトペの意味理解課題を行い，「触覚から触覚以外」への意味拡張，すなわち「具象的な意味から抽象的な意味への意味拡張」による日本語オノマトペを連続的に習得しているかどうかを検討した。その結果，やはりより具象的な意味を持つ触覚オノマトペのほうが抽象的な意味を持つ触覚以外のオノマトペよりもより良く習得されていた。さらに，「触覚から触覚以外へ」の意味拡張により多義オノマトペを習得しているかどうかを検討するために，一般の語彙知識から触覚オノマトペと触覚以外のオノマトペの習得について 3 つの因果関係モデルを設定した。モデル 1 は語彙知識から触覚オノマトペへ，さらに「触覚から触覚以外へ」という直列因果関係モデルを想定した。モデル 2 は語彙知識から触覚オノマトペと触覚以外のオノマトペが独立して習得されるという並列因果関係モデルである。モデル 3 は，「触覚から触覚以外へ」という直列的な因果関係に，語彙知識から触覚オノマトペと触覚以外のオノマトペが別々に習得されるとする並列的な因果関係を加えて，混合因果関係とした。SEM による因果関係の解析結果，モデル 2 が最適であることが示された。したがって，日本語学習者は，同一のオノマトペの触覚と抽象的な意味を別々に習得していると考えられる。

第 6 章では，日本語の語彙知識と日中オノマトペの音韻類似性という 2 つの要因に焦点を絞って擬音語と擬態語の習得を考察した。12 語の擬音・擬態両用のオノマトペの擬音語の使用条件で，日本語学習者 27 名に言語連想実験を実施し，12 語の刺激語に対応する中国語の擬音語を選定した。さらに，異なる日本語学習者 35 名に音韻類似性の実験を実施し，7 段階のリカード尺度により日中両言語の擬音語の音韻類似性の度合いを数値化し，12 語の擬音語を「高類似性」「中類似性」「低類似性」「超低類似性」の 4 グループに分けた。そして，日本語学習者 141 名を対象に擬音・擬態両用のオノマトペの意味理解課題を課した。同時に，語彙テストで語彙知識を測定した。語彙テストに基づいて，141 名を語彙力別に「上位群」「中位群」「下位群」に分けた。さらに，回帰木分析で，L2 の日本語の擬音語と擬態語の習得に語彙力と日中両言語の音韻類似性がどのように影響するかを検討した。その結果，擬音語の習得では，音韻類似性が最も強い予測要因となった。音韻類似性の高い擬音語のほうが日本語学習者に理解されやすかった。次の要因として，語彙知識の影響が見られた。語彙力の高いほうがより良く擬音語を習得していた。これにより，L2 の擬音語の習得には母語の中国語の正の転移による促進効果が見られた。一方，擬態語の習得では，語彙知識が最も強い要因となった。特に，語彙知識の中位群・下位群は擬態語の正答率が低かった。

第 7 章では，語彙的類像性の異なる 3 タイプ（擬音語，擬態語，擬情語）のオノマトペの各 10 語，計 30 語を刺激語として，同一オノマトペ（同義）のスル動詞として

の使用と副詞としての使用の 2 条件で，日本語学習者 88 名に擬音語，擬態語，擬情語の意味理解課題を課し，オノマトペの品詞転換が L2 の習得にもみられるかどうかを検討した。また，オノマトペの種類による語彙的類像性の効果について追認した。文法テストも同時に施し，オノマトペの品詞習得への影響を検討した。その結果，全体的にみると，副詞としての使用のほうがスル動詞としての使用よりも得点が有意に高かった。同一のオノマトペの副詞とスル動詞として使用の習得は同じではなかった。スル動詞から副詞への品詞転換による習得という連続性はみいだせなかった。擬音語と擬態語の品詞習得では，副詞としての使用のほうがスル動詞よりもより良く習得された。さらに，「擬音語＞擬態語＞擬情語」の順でオノマトペの副詞としての使用をよりよく習得していた。つまり，オノマトペの習得には語彙的類像性の効果がみられた。

第 8 章では，名詞句（NP）付加（Class #1），NP 付加・NP 不要（Class #2），NP 不要（Class #3）の 3 タイプの擬情語動詞の各 6 語（合計 18 語）を刺激語として，日本語母語話者 76 名と日本語学習者 88 名の NP 付加の判断課題を課し，異なる文法形式を有する擬情語動詞に NP の標識を正しく付加できるかどうかを検討した。日本語学習者には，文法テストも実施した。日本語学習者はオノマトペの NP 付加ルール（Akita, 2010）にしたがって 3 タイプの擬情語動詞に NP を適切に付加したが，日本語学習者は，NP 有標の擬情語動詞文の統語構造を NP 無標の擬情語動詞文よりも正確に理解していた。また，擬情語動詞への NP 付加において，過剰一般化が観察された。分類木分析の結果，Class #1 の擬情語動詞は，文法力の高低に関わらず身体に関わる NP を正しく付加していた。Class #3 の NP 付加は，文法力の高い上位群しか NP 付加を抑制できなかった。これにより，日本語学習者は豊かな文法力を身につけてから，NP 標識を持たない擬情語動詞文を無標化させることができるようになることがわかった。

最後に，第 9 章では研究結果全体について議論した。まず，擬音・擬態両用のオノマトペ，または触覚の多義オノマトペの基本義と拡張義の習得には連続的な習得順序がなかった。多義オノマトペの語義を個別に習得した結果，同一のオノマトペのそれぞれの意味が意味ネットワークの形式ではなく，分散的にメンタル・レキシコンに記録されていると予想される。また，SEM による因果関係についての解析結果では，語彙力とオノマトペの習得には有意な因果関係がみられた。語彙知識の増加とともに，オノマトペの知識も蓄積されてきたことが示唆された。多義オノマトペの意味ネットワークの形成は日本語語彙知識に依存すると考えられる。これは針生・趙（2007）の主張と一致した。また，日本語学習者の擬音語と擬態語の習得に影響する主要因が異なることから，音象徴への感受性によりオノマトペを感覚的に習得する可能性は低く，むしろ一般語彙のように習得していると考えられ，「一般語彙としての日本語オノマトペの習得」という仮説（針生・趙, 2007; 飯田他, 2012; 馮・玉岡, 20018b）を支持した。さらに，擬音・擬態両用のオノマトペ，触覚の多義オノマトペの基本義と拡張義の習

得には，いずれも具象性が高い基本義が具象性の低い拡張義よりも習得されやすいことがわかった。また，日本語母語話者は，オノマトペの統語習得プロセスはスル動詞から副詞へと品詞転換しているのに対して，日本語母語話者はこうした品詞転換過程が存在しないようである。さらに，日本語学習者は，擬情語動詞文の NP 付加ルールを適用していなかった。本研究では，以上のように，日本語学習者のオノマトペの習得は，日本語母語話者とは大きく異なっていることを実証し，それらを詳細に解明した。

論文の審査

口述試験では，学位申請者から博士論文の内容に関しての説明が行われた後，審査委員からそれぞれに質疑応答が行われ，主に以下の点についての指摘，質問，コメントがあり，学位申請者との質疑応答があった。

(1) 本博士論文では，第 2 言語あるいは外国語としての日本語学習者についての議論が中心ではあるが，ここ数年において，第 1 言語の研究も出版されている。それらについても触れるべきであるという指摘があった。これについては，新しい文献を加えることを，馮亜静氏に要求した。
(2) 本博士論文では，第 1 言語の習得については先行研究の結果や議論をそのまま踏襲している。しかし，ほんとうに第 1 言語で議論されている習得のプロセスが正しいかどうかは疑問があるとの指摘があった。これについては，本論文では，中国人日本語学習者を対象としているので，第 1 言語話者については研究の範囲ではないが，第 2 言語におけるオノマトペの習得から逆に第 1 言語における習得へ提言することも可能である。そこで，こうした提言を加えることを要求した。
(3) 本博士論文の第 3 章は，認知意味論の立場からの直感的な議論に終始しており，論理的な展開に無理がある部分が見受けられる。第 3 章については，内容を論理的になるように訂正することを要求した。
(4) 共感覚比喩として，聴覚と視覚で分けることができる。しかし，この区別が曖昧なオノマトペも存在するので，こうした区別は必要ではないという議論もあるとの指摘があった。これについては，本博士論文では，区別することを前提として議論しているので，変更は求めないことにした。こうした最近の議論については，今後の課題とした。
(5) 第 7 章で，第 1 言語ではオノマトペが動詞から副詞の用法へと品詞上の習得が進むとされているが，中国人日本語学習者の場合は，逆に副詞から動詞の用法という順序で習得されるようであると，馮亜静氏は議論している。これは，日本語のオノマトペ相当の語が，中国語では動詞として出現するからではないかという指摘があった。これについては，母語である中国語からの影響である可能性が大いに考えられる。しかし，現時点では直感的な考察しかできないので，この点についても今後の課題とした。
(6) オノマトペは，有標と無標の統語構造を持つ。オノマトペにスル軽動詞が付加されて他動詞として使用される場合は，目的語を取り有標の構造となる。子の場合は，共

起する名詞などからオノマトペの意味を推測し易いのではないかという指摘があった。この可能性は大いに考えられる。これは他動詞あるいは自動詞としての使用について比較することが可能であるが，本博士論文のデータ収集ではそのような研究デザインになっていないので，これについても今後の課題とした。

(7) オノマトペの習得順序について，本博士論文では「連続性」という表現を使っている。これは「順序性」というべきではないかとの指摘があった。本博士論文では，意味拡張に言及して連続性という用語を使用している。この用語の使用については，本博士論文の中で，定義が明瞭であり，用語の変更は博士論文全体にわたるので，そのままの表現を使うことで認めることにした。

論文審査委員会による合否判定

以上のようにさまざまな指摘，改善点，今後の検討についての助言があったが，それぞれの指摘について適切な回答が得られた。全体として本論文は質量ともに博士課程後期の学位論文としての基準を十分に満たしていると審査委員会の全員一致で判断した。したがって，本論文を合格と判断した。